

「コロナ危機と 医療・介護政策過程」

【日時】

2020年7月30日（木）
17:30~19:00

【参加方法】



ZOOM ウェビナー

以下のリンクや
横側の QR コードから
参加登録を
お願いします。

[https://zoom.us/webinar/register/
WN_33CvYwNTSwGogR7xOKeXxg](https://zoom.us/webinar/register/WN_33CvYwNTSwGogR7xOKeXxg)

【言語】 日本語

報告者

石垣千秋（山梨県立大学准教授）

単著『医療制度改革の比較政治-1990~2000年代の日・米・英に
おける診療ガイドライン政策』（2017年、春風社）

共著「医療制度から考えるコロナ危機-感染者14万人でも「医療
崩壊」しないドイツ、感染者1万人で「医療崩壊」の日本」『論座』

<https://webronza.asahi.com/authors/2019081900010.html>

(2020年4月22日)

ディスカッサント：朴志善（岡山大学助教）

モデレーター：具裕珍（EAA 特任助教）

プログラム

- 17:30-17:35 趣旨説明
- 17:35-18:15 石垣千秋（山梨県立大学准教授）
- 18:15-18:30 朴志善（岡山大学助教）
- 18:30-19:00 総合討論

新型コロナウイルスの感染拡大が本格化して半年近くが過ぎた。謎の肺炎の存在が伝えられてから、グローバル化した世界の大都市が封鎖（いわゆる、ロックダウン）に追い込まれ、日本でも「緊急事態」の宣言による外出自粛、店舗の休業が要請された。

「パンデミック」のなかで、各国政府は様々な対応をしてきた。本ワークショップでは、医療と介護の政策決定過程に注目して検討をしたい。

日本では、未曾有の感染症病拡大を受けて、数多くの意思決定が行われてきた。成果もあったものの、問題も多々露出している。未知のウイルス対応という不確実性下での意思決定過程は平時とはどのように異なるのか。

また、感染症という非常に専門的な分野をめぐる意思決定はどのように行われるのか。そこに参加する専門家と政治の間にはどのような関係がありうるのか。

早期収束の見通せない今現在、日本と韓国のケースを検討することで、コロナ危機からポスト・コロナ時代を「人」と「社会」、そして「政治」との関係を考える時間を持ちたい。

【主催】東京大学東アジア藝文書院（EAA）